
血紅色の想い

Yn

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血紅色の想い

【Nコード】

N 6 6 9 7 P

【作者名】

Y n

【あらすじ】

舞台は精神科。

リストカット癖のある冬馬美麗は、ある日、少し大人しく病んでいる中学生、小松さんに目をつけた。

最愛の玲央が小松さんを心配し始めてから、美麗は嫉妬心を抱き、リストカット癖がエスカレートする。

しばらく経つうちに小松さんには、辛い過去や出来事が。

その出来事が可哀想なことで、玲央に心配されているのが羨ましいことで2つの感情が交差する。

（前書き）

登場人物

冬馬美麗 とうま みれい

今回はリストカットの心理を教えてください。

鬼丸玲央 おにまる れお

美麗の兄。夢は精神科医。

小松真秀子 こまつ まほこ

普通の少女だが、どこか病んでいる。

佐々木梨沙 ささき りさ

玲央たちに興味を抱くが、歪んでいると思う。

血って怖いよね、どろどろ感があるから。でも、いつもほとんど毎晩に切っている私には血って慣れっこだから。怖くて気持ち悪いものだから。

私は周りの皆みたいに群れるなんてことはしない。皆みたいに仲間外れにされるからって、皆と同じことなんてしない。私たちは一人、同じ雑草じゃないし、特別な存在ではなくて、宇宙に一つだけの生命なんだよ。皆に価値があるんだよ。それを同じアクセサリにして、大事な個性を汚している。私はそれをもつたいたいと思う。大人に近い年齢なのになにやら楽しそうに騒いでいる子たちがいる。まだまだ可愛らしい子たちだと思う。でも、私は自分の個性を汚さないため、大人しく、堂々としている。別に私が特別じゃなくて尊厳をちゃんとしたい。周りに左右されたくない。それが私の個性なんだ。

いつも噂話をする子たち。きっと学ぶ機会が無かったんだ。いい人に出会っていれば十分にいい子になれる。そのチャンスがないんだ。決して群れないが、人間観察に夢中の私。

Dルーム（皆の集合場所）での話が終わると、皆はいつせいに騒ぎ立て、トランプをしている。楽しそうだな、まだまだ無邪気なんだな。私からすれば、皆はきつと無邪気なだけで悪い子ではないと思う。私はただ、皆と群れるのが嫌で、群れないだけなんだ。

おしゃれが好きそうな子、体格のいい子、大人しくて無口な子……どこにでも、クラスには一人くらいいるという個性だ。私には気になっている子がいる。いつも、群れていて、皆の言うことを利く子。友達がいっぱいいるが、合わせているだけの子がいる。この子に特に目立つものはない、雰囲気も合わせて可哀想に見える。この子の外見が悪いからじゃない。

雰囲気がそう見える。顔つきがいつも自信なさそうに相手に賛成す

る。そんな子は沢山いるが、その子は何故か目を引く。何か事情があるような……そういう雰囲気^{こまつまほこ}が惹かれる。この子は、小松真秀子という。

この子は皆から「お姉さま」と呼ばれている。落ち着いているからだろうか。いや、いつも合わせているだけ。傷つくのが怖いのだろうか。トラウマでもあるのだろうか。

私にはそんな大それた力は無い。例えば、自分が崇拜されたいなんて、そんな傲慢な気持ちは無い。というか、私が崇拜されるなんてとんでもない。私は、自尊心が低いかもしれないということ。でも、兄の玲央が他の子と仲良くするのは気に食わない。その時はすぐに切ってしまうかもしれない。例えば、一番嫌なのは小松さんと玲央がニアミスして、恋じゃなくとも仲良くしていたら。友達もいるし、玲央みたいな優しい人に恵まれて……羨ましすぎる！

こういう思いを抱えてから私は小松さんに目を向けたのだ。友達になりたかった。私とは気の合わない男子たちとも楽しそうに会話をしている。私が仲の良いといえるのは、玲央くらいだ。でも、社交的な人が何よりも羨ましかった。彼女たちはどんだけ、楽な人生を歩んでいるんだろう。その嫌気がたまらなかった。自分は、可愛そうな身。そう思いたくなくて。

玲央はWebサイトで、相談窓口を開いている。その時に相談に乗って知り合って、同じ病院にいたというのが小松さんである。そのこともあって、私は玲央から、小松さんのことを教えてもらい、向こうは私のことをよく知らないだろう。変わった子とは思っているだろうけど。

小松さんは金髪にボブの髪型をした今風の子である。この子は特別に可愛いというわけでもないし、目立つところがあるわけでもない。この子は何故か惹かれるんだ、玲央が気にしている子だから気になる。何故、惹かれるか。何故、玲央はその子を気にしているのだろうか。

私の部屋は一〇八号室の一人部屋である。孤独の部屋だ。私が勝手

にそう呼んでいるにすぎないが、私の感性では休み場ではなく、孤独になる部屋だ。リストカットの部屋でもある。眠れない時に切つて血を流す。その血はきつと、心の悲鳴だ。もう、私は十六歳にして、心の悲鳴を上げている。これから、どう生きようか。

院内学級で、私はA組だ。親友の林龍山もA組。リンロンシャオ龍山は玲央とも親友で、三人組でよく行動する。龍山は院内学級では数学しかしない。ルービックキューブが大好きで、数学に直向きな情熱をぶつけている。無口でいつも“問題児”というレッテルを貼られている。彼は中国とイギリス人のハーフで、留学している。

小松さんは、C組。(A組は特殊な子のクラス、玲央はB組。B組は高校生。C組は中学生。小学生はDクラス)休み時間、C組に行ってみることにした。向こうは私のことなんか気にもしていない。でも、気になる。玲央が興味を持つ、この子はどんな個性があるのか。隣に座つて、友達ととても楽しそうに話している。私も混ざりたかった。小松さんは、ファッション雑誌を読んでいる。この子は服のセンスが良く、おしゃれだ。

「そのリストバンド、可愛いね」

ボーっとしていると横から声がした。小松さんだ。女性らしくつて、化粧もちゃんとしていて、すっぱんの私とは違う。健全な感じもするし。

「えっ……えっと」

私は焦るように声を出す。いきなりの言葉にびっくりした。リストカットしていることをばらしたくない。気持ち悪い人だと思われる。リストカットする人は、大抵、辛い思いをしているはずだ。なのに、なんで、皆は、避けるのかな。そういう風に偏見する様子が、病んでいる子にとどめを刺す。醜い現実だ。

「どこで売ってたの？」

「普通のお店だよ」

「私もリストバンドつけてみよっかな」

「お姉さんってイカス」

この子は、堂々と喋っている社交家にしか見えない、何かあると思うんだ。何か悩みを抱えている？ なんとなく感じる。この子は、元気に見えるが、そのエネルギーには欠けている何かがある。瞳の光が消えている。でも、この子からリストカットのことが見つからなくて良かった。それを考えると怖い。

そういう風に群れている小松さんたち。いつも皆が周りにいるから、安心していい。楽そうでもいいな。私は、もう幼稚園からずっと独りだったもの。いつも頼りになる人はいない。

小松さんたちはC組のクラスに戻っていく……。

「おい！ 美麗」

玲央の声がした。私は途端に嬉しくなった。

「何？」とわざと、私はぶっきらぼうに言う。

「夜、俺の部屋に来てほしいんだ」

夜に何があるのだろう。きっと、玲央の部屋の一〇一号室には地下室がある。そこでパソコンと電話を使って、夜に精神不安定になった人の相談に乗るといふ。私と龍山の三人で、なんとか自殺願望の人やリストカッターの人を救う。私みたいな病んでいる人が相談に乗るなんて皮肉な話だけどね。前にも誘われたことがある。

「美麗。お前の力を借りたいんだ、今度も手伝ってくれないか？」

私は頷いた。仲間と眠れない夜に何かを解決しようとするのはとてもなく嬉しいことだ。私は部屋に戻って、孤独の個室である一〇八号室に行った。今日は切らずにすみそうだ。手首をながめた。もう、傷だらけで惨めだ。私は、こんな風になることを望んでいたのだろうか。いいや、そんなことは望んでいない。何でこんなことをしてしまうんだろう。

夜になった。今の時間は、消灯の九時である。女子棟から、男子棟に移動した。看護婦に見つからない様に。看護婦は観察のプロだ。龍山もいて、地下室に移動した。いつも哲学書しか読まない玲央の部屋は本ばかりで、こんなこととして、よく自殺という心理にならないか不思議だ。

パソコンのチャットをした。入室した。

リミカく私は、中学生です。友達に誘われて、Ｄｒライオンに来ました。

ここでは、リミカと呼んでください。Ｄｒライオンさんは、私をどう思っているの？ 病んでいる子を愛していると言っていたけど、貴方は私に何ができるの？

それを教えてください。そうでないと私は貴方に何も頼めません。

Ｄｒライオンとは、玲央のハンドルネーム。玲央はこう打った。

Ｄｒライオンくリミカさん。俺は君が悪い子じゃないかぎり好きです。もう、メールをくれた時点で俺の患者です。友達です。

君は俺を信用できていないかもしれないけど、俺は君を信じたい。それが出来ることです。

玲央は純粹に病んでいる子が好きなんだ。”悪い子じゃない限り”
って言う境界線がよくわからない。

リミカく貴方なんか救ってくれるわけない。

私みたいな不幸な子を貴方なんか救えるわけない。

無理だよ貴方なんか死んだほうがいいんだよ私なんか生まれてこなかったほうが良かった

リミカさんは落ちた。リミカさん、死なないで生きてね。絶対、玲央が助けてくれるから。

「この女、きちがいだな」と龍山は顔をしわくちやにして言う。

「龍山！」

私は龍山を叩いた。こういう子を見て、一番可哀想に思っているのは玲央だ。玲央なら最高の精神科医になれる。私はそう思う。チャ

ツトの客はリミカさんだけだった。

「俺も自分の部屋に戻ろうかな……」

龍山が言うとドアの開く音がした。看護婦だろうか？ 地下室にいるのはわからないだろうけど、ベッドに玲央がいなくなるとちょっと心配だ。足音がする、誰だろう。足音は、すぐになくなった。

「龍山、美麗。もう、お前ら来なくていい。俺のためにこんなに危険を冒してまで来るなんて」

玲央は迷惑に思ったのか、似合わず、弱そうに言う。でも、私は首を横に振った。

「うつん、玲央のためならがんばれる。私たちは、玲央にどれだけ助けられたと思っているの？ ね、龍山」

「……」と龍山は黙った。目の焦点が合っていない。

玲央が幸せならばそれでいい。そして、玲央が私を愛してくれればそれでいい。玲央に愛されたい、大事にされたい。思春期の乙女の心境だ。私たちは自分の部屋に戻って、寝ることにした。男子棟から難なく帰っていくのは、ちょっと危険だ、けれども。

Dルーム（男子棟と女子棟の間）に戻ると、佐々木梨沙という小松さんの友達が携帯をいじっていた。病棟は携帯を持ってきてはいけないのに凄い勇気だ。

「冬馬さん、どこに行っていたの？」

「……」

私は黙る。でも、半分はばれている感じもする。子供は鋭いのだ。

「鬼丸くんのところでしょ？」と目を光らせて言う。

「何でわかるの？」

「男子棟から来たじゃない」

なんかこの子に見張られている感じがする。

「ばらすなら貴方が携帯を持ってきているのも言うよ」

察したのか、佐々木さんは、女子棟に帰っていった。相打ちだ。まずい、このままだったら見つかるかもしれない。私は少し不安になりながら孤独の一〇八号室に帰っていった。でも、大変だ。もし、

見つかったら強制退院になるかもしれない。玲央と龍山のそばにいらなくなる。それは大問題だ。高校も通えるかわからないし、友達だって玲央たち以外にいない。玲央たち以外の友達なんてありえないんだ。私は眠れないのを覚悟して、布団にもぐった。眠れる子が羨ましい、友達が普通にいる子が羨ましい。私にはない要素である。そりゃあ私には普通の子とは違う能力がある、感受性だ。でも、誇ることは恥ずかしいことだ。ただ生まれ持ったものを何故、誇らなければいけないのか、ということ。

朝、私は寝坊した。Dルームに行くと龍山と玲央がいた。他に誰もいない。

「ねえ……玲央。皆はどこに行っただの？」

「散歩。俺たちは、自習」

私の苦手な勉強だ。玲央は勉強が大得意である。玲央は入院しているが、アロン病院の期待であり、憧れである。

玲央は楽々と問題を解く。私は勉強が苦手でいつも玲央に頼っていた。勉強なんて何でしなければいけないの。勉強が出来ないのっていらいらする。たぶん、私にはあっていないんだ。

小松さんはどうなんだろう。勉強って楽しいんだろうか？ 同性なのに惹かれる何か。何だろう、何が魅力で惹かれていくのだろう。小松さんに話しかけてみた。小松さんは一人でいる時が全くなく、そこがまた羨ましいのだ。

「小松さん」

「美麗ちゃん！」

私に対して美麗ちゃんと呼んでいる。中学生で、後輩なんだから、普通に。先輩と呼ばばいいのに、なんか社交家っぽくてむかつく。私は小松さんと呼ぼう。

「小松さん、玲央と仲良いの？」

「鬼丸くん？」

「私、玲央のこと、親友って言うくらい大事」

「熱愛だね」

そう、玲央に対して熱愛以外の何者でもない。

「小松さんは？」

「私も鬼丸くん無しじゃ生きていけない。いつも心配してくれる。

父親がいない私のことを……」

父親がいない？　そういう気の毒な理由で、玲央と仲良しなのかな。なんだか、寂しそう。小松さんは言った。

「世の中、離婚した人なんていくらでもいるよ」

じゃあ、その悲しそうな目は何だとききたい。彼女が思うには、父親がいない人なんて沢山いる、自分を特別視しなくなてこういうことを言う。だが、事実、自分は辛いから態度に出るのだろう。もう、これ以上何も言わないほうがいいと思う。彼女が可哀想に思えてくる。

食事の時間になった。看護婦が食事のデータをとっている。食べ終わった龍山は近くによつて、看護婦の横に立っている。何をするのかな。私は食べずに龍山を見た。

「何を書いているんだ？」

「食事のデータだよ、龍山くん」

「悪趣味だね」

いやいや、そういう理由じゃなくて、仕事だから。

「看護婦も医者もやつぱり、変態」

一言、そう言ってから、龍山は爪を噛んで男子棟に戻った。私は小松さんを見た。いつもセンスのいい服装で友達も沢山いるし、羨ましい。隣の佐々木さんと楽しそうにしゃべっている。私と玲央たちの方が仲は良さそうだが、同性の絆も悪くはない。でも、小松さんは、男子とも仲が良いのだ。だけど、私にとって全く関係のない男子だけだね。でも、小松さんの様になりたいというわけではない。私は私自身が一番好きなんだよ、楽しいんだよ。だって、世界観が他の人と違うから。群れずに孤立し、変わった友達と仲良くし合える。感受性が高いから、変わったものを感じる。こんなに楽しい人生は他の人には楽しめない。

他の子とは、馴染めない私は、玲央や龍山と仲良くしていると、他の子は、私たちを見る。やっぱり、私たちは凡人と違う空気を持っているからだと思う。なんで仲良くしてくれないか。何故かというと生きている意味をいつも常に考えている私たちは笑うべき生き物なんだ。

小松さんは私のことをどう思っているんだろう。たぶん、私だけが小松さんを気にしているんだよ。玲央に訊いて見ようか。

「小松さんは、患者の中でもかなりの重症だよ。にわかには信じられないかもしれないけど」

何だろう、この気持ち。小松さんになんか不思議な気持ち。強いて言えば、小松さんを魅力的に感じ、そんな自分が許せない気持ちだ。複雑すぎる……きっと心の単純な人にはわからないだろう。

また夜になった。玲央の部屋に移動しなければ……。誰かいないか確かめた。看護婦さんもパソコンに夢中だ。

「どこ行くの？」

佐々木さんだった。

「やっぱり、行くんだね」

何かがわかつている様に見える。油断ならない。なんだ、この子。何かを知っていると思う。

「私が何しているか、わかる？」と私が言う。

佐々木さんは、深刻な顔をした。

「鬼丸くんって正義の味方なの？」

唐突な言葉にびっくりした。

「ヒーローなの？ スーパーマンなの？」

なんでそうなるの？ 玲央は優しいけど、正義の味方とか、スーパーヒーローとかじゃないよ。大体、何でもこの患者が玲央のことをそういう存在だって言うの？ ということは、玲央がネット上のDライオンってことも知っているのか。ネット上で色々な精神病の人を救ってきた玲央だ。きっと噂になっているのだろう。アロン病院では、玲央の名を知らない者はいない。私のお父さんも有名だし、

玲央は、お父さんの息子でもあるし。

「質問に答えてよ」

「貴方は、玲央のファンなの？」

「あの人なら、お姉さんも救ってくれると思って」

ああ、小松さんのことか。あの子、重症なんだものね。

「お姉さん、可哀想。母子家庭なんだけど昔に父親から性的虐待をされたらしいんだ」

そうなんだ。私は父親に殴られたこともない。だから、気持ちはわからないが、その可哀想な気持ちが魅力的に変わる。興味になる、惹かれる。

「冬馬さんは、何故、いつも鬼丸くんというの？」

「私は玲央に散々助けられたから……」

「そうなんだ」

理由がわからないが、佐々木さんは少しがっかりして、

「じゃあ、お姉さんも助けてほしいな」

そう言つて、部屋に帰っていった。私は玲央の元に行かないと。

玲央と龍山はもうそろっていた。龍山は薬物でもやっていそうな危ない顔と火傷で失明した右目だが、なんだかかつこ良く、その暗そうな顔からは想像もつかないくらい綺麗な良く通る声である。玲央は、肌が青白く、健康とはとても言えない。目は切れ長で睫毛が長い。こんな病んでいる二人と仲良くしている私もとてもなく病んでいると思う。それが、私は嬉しくて、皆とは違う変人さがあつて、素敵だ。

玲央の部屋に入る。玲央と龍山は私の顔を見て、頷いた。すぐに地下室に移動した。メールボックスを見たら、またリミ力さんからメールが来ていた。

「リミ力です。私の友達が今、うつ病で酷いことになっています。母子家庭で、中二の時に父親から性的虐待をされました。今、フラッシュバックでわけがわからない様です。その子、可哀想なんです」
このメールは、今日の九時十六分当たり、消灯は九時であり、今は

十時を過ぎた。しかも、どこかで聞いた様な事件だ。私の顔を見て、玲央は何かを察知したようで。

「虐待された子なんて腐るほどいるよ」

小松さんじゃないのかな。ということは、リミカさんはこの病棟にいる人となる。なんだか、この世の中、何があるかわからない。病棟から、大きな音がする。

小松さんの声だ。小松さんに何があったのだろう。玲央はすぐに走っていった。私はその様子を見て、少し、胸が苦しくなった。龍山はすぐに部屋に戻り、私は玲央の部屋で待機だ。ドアの近くで会話を聞かずにはいらなかった。

「小松さん、落ち着いて」

「鬼丸くん、私、汚れているんだよね……」

私はこっそりDルームに向かった、看護婦さんから見て、小松さんに注目している。

「私、汚れているから、この世にいちやいけないんだよ……ね」

「小松さんは汚くなんかないよ……」

玲央は一生懸命に小松さんを励ます。私にとっては苦しい心境だ。可哀想である様な羨ましい様なこの心境はいつたい何だろう？ きっと看護婦さんも玲央もわかつてはくれないだろう。私だけが感じる不思議な心境である。暴行されたときになんで女性のほうが、“汚れている”なんて思うのかな。それを可哀想に思う玲央は私だけを愛してくれているわけじゃないんだ……哀しい。

「もう、私、どうしたらいいかわからない……！」

かすかに聴こえる物凄い泣き声。きっと今、この子は玲央に抱きついている。私は血のような怖くて気持ち悪い感情を抱いた。可哀想と感じているけど、羨ましいような……嫉妬心に近いものだ。どろどろ感のあるどす黒いイメージの心境である。

私は、自分の部屋に戻り、手首を切った。こういう色だ、この感情は、きっと。私はこの血を見て、生きていることを自覚する。そして、私の心境はこの様な色だ、と知る。

そのことばかり考えていたら、いつの間にか朝になっていた。手首を見て、私は手首を切ったんだ、と少し後悔する。小松さんみたいになりたいってわけではない。羨ましいだけなら、こんなに妬かない。可哀想なところが自分の病んでいる部分と似ていて、この感情を抱くのだろうと思う。

朝の五時を回っていた。玲央と龍山が起きていた。私は嬉しく思った。他の患者がいなければ、こんなにも安心するものなのか。

「美麗、俺、今日も寝なかった」

「俺も」

やっぱり、二人とも寝てない。私は安心した。私だけは眠りについてたけどね。

「お前、また切ったのか？」

リストバンドをつけていなかった。玲央に見つかった。でも、焦りはなかった。

「ごめん……」

私は謝るしかなかった。あの子みたいに、小松さんみたいに私ももっと可哀想になりたい。もっと玲央に愛されたい、心配されたい。

「あの子よりもリスカしている私のほうが重症だと思うよ」

口から思っていることが出てしまった。玲央はため息をついた。

「お前さ、あの子に嫉妬してるの？」

恐ろしい言葉だった。一番言われたくない一言に私は嫌悪感を持った。

「それで切ったの？」

「違うよ」

「嘘をつくな！」

玲央は真剣な顔だ。怒りも混ざっている。鋭い。玲央もきつと感受性が高いのだろう。玲央は、少し俯き、印象的な上目遣いで睨み、口を開いた。

「傷を見せる」

傷の手当をしてくれた。いつも傷をほったらかしにしている私より

も玲央のほうがよく私の体を思いやってくれている。優しくされて思った。可哀想になりたい、愛されたい、大事にされたい。その気持ちがいっぱい、切ったことが酷いことだなんて思わなかった。玲央が丁寧に手当てしているから、なんだか嬉しくなって、

「フフフッ」

私が、不敵に笑うと、玲央はにやつと歯を見せて笑った。

「お前、おかしいんじゃないの？」

「だって、嬉しいから」

玲央は、本当に丁寧に手当てしていて、その姿がどんどこよくみえてきて、最後にちゃんと包帯で傷口を結んでくれた。私よりずっと手当てが上手いことを知って、何でも出来るんだな、ってドキッとした。

小松さんは昨日と違って楽しそう。友達がいっぱいいるという面でも羨ましさはある。でも、そんな子なんてどこにもいない。普通の子にも見えるのに玲央の様な私の仲間から愛されていること、とても気に食わない。社交下手で、うつ病の子ならわかる。それなのに普通の子。この子は本当に性的虐待をされていたの。なんでうつ病なの。知らない事実、心が揺れ動く。その事実を受け止めたら、可哀想な気がして、それで羨ましいという感情が芽生える。可哀想と羨ましいが交差する。正反対の心なのに。

夜になった。看護婦はなにやら焦っている様子だ。

「加藤さん、どうしたんですか？」

加藤さんとは看護婦さんのこと。

「真秀子ちゃんが帰ってこないのよ……」

どこに行ったんだろう。鍵のついていないアロン病院は危険がいっぱいなのだ。看護婦さんも捜しに行っている。私なんかが捜しても見つからないだろうな、って思って玲央の部屋に行った。玲央は、パソコンの前で困った様子を見せる。私も何だろうと思って、メールボックスを見た。

「Drライオンさん、リミカです。」

友達が夜になつてゐるのに帰ってきていません。私は精神科に入院しています、看護婦さんも捜しています」

悟った。リミカさんは、アロンの病棟内の患者のことだろう。佐々木梨沙あたりが適当かなと思った。

「このメールを打っている人がアロンのどこかにいるな。アロン病院内でも宣伝したからそこから、ここの患者にも知れ渡ったんだろう」

「小松さんを捜しに行こうよ」

「お前、俺が小松さんの方に行つてもいいわけ？」

にやつとしながら言う。私の気持ち、気付かれているな。龍山は部屋に来ていない様だけど、しょうがない、捜しに行こう。

私たちは地下室から、地上につながる階段に向かつて前進した。鍵の閉まつている病棟からは患者は出入りできない。なんだか、急がせる感じである。小松さんは、どうなっているのだろう。嫌な出来事じゃないといいけど。哀れさに負けたくないことと、哀れになつてほしくない気持ちが交差する。それで助けたいんだ。憎さとは別の意味。奇妙な嫉妬である。どちらかというと愛に近い気持ちである。

森の中に入つていった。暗い森に。こんなところにいるわけがない、と思うくらい暗い。玲央と手をつなぎ、歩いていく。玲央がいるから大丈夫だろう。でも、怖い。夏でも小枝が落ちている。踏むと恐怖の音がする。怖がりすぎか。

しばらく、奥まで歩くと白い様なものが見えた、女の人だ。横になつて、倒れている。金髪の女性である。服を剥ぎ取られている。近くによつて見ると、小松さんだということがわかった。玲央は小松さんに声をかけたが、返事がない。息はしているから生きているだろう。玲央は、小松さんの服を着せ、横抱き（お姫様抱っこ）で運んでいく。その姿が胸を痛ませる。切りたくなつたので、手首を爪で引っかけて自傷する。小松さんは途中で起き、恥ずかしそうにして、普通に歩くようになった。身体が震えている。何があつたのだ

ろう。病棟についた。

私は病棟に帰ってすぐ、トイレで切っていた。切っても満足できず、もどかしかった。小松さんはお風呂に向かった。身体を洗っている。でも、何であんな森にいたんだろう。

それにしても大変だ。私の手首の傷は箇所が増えるのではなく、深くなっていた。痛みをあまり感じなくなっていた。すぐにリストバンドで隠した。

小松さんがお風呂から上がると、壁に頭をぶつけていた。自傷行為である。ぶつかっては泣いて、ぶつかっては泣いて。何だろう、何が動機なの？　ざまあみる？　嫉妬心ならそう思うだろうけど、どうしたの？　と言って、仲良くなりたいたい。助けてあげたかった。でも、私みたいな友達は望まないかもしれない。そのまま小松さんを見送った。私はその後、眠った。何故だろう。久しぶりに熟睡が出来そうな夜だ。玲央は何で小松さんを連れて来られたの？　と看護婦さんから訊かれていたみたいだが？

次の日、Dルームの小松さんの周りに女子がたわむれていた。男子も黒板に何かを書いている。私は小松さんを見た。小松さんの顔は落ち込んでいるというより、気抜けになっている。黒板の言葉を見た。“汚れた女”とか“娼婦”と書いてあった。

「お姉さん、こいつら酷いよね」

女子の一人は小松さんに声をかけるが、小松さんは反応していない。「お前、娼婦になるのか？」

「男子、うるさい！」

全く、ことの重大さが分かっていない。私もわかっていない。何が起こったのかすらわからない。でも、大変なことだというのはわかる。でも、この人たちはわかっていない。わかっていないから、こういう風に騒いで、この子の新たなニュースをイベントにして、楽しんでいる。女子も黒板消しで消すことすらしない。だから、他人事だ。

こういうとき、本当ならなんて声をかけていいかわからないはずだ。

看護婦さんの加藤さんは、黒板の文字を黒板消しで消し、男子を怒鳴りつけた。玲央はそれ以上にかんかんである。

「レイプされて死んだ人、いるんだぞ！」

この声が、Dルーム全体に広がった。小松さんは玲央によって連れて行かれた。強い力で、小松さんの腕をつかむ。私の胸が痛んだ。玲央と小松さんが個室で面接している。こうやっていつでも主治医以上に患者を思いやっている玲央。私はそれを思いながら更に胸が痛くなった。隣に加藤さんがいた。

「玲央くんは今、沢山の家庭に恵まれなかった子達の家庭の相談とか、人間関係の相談とか、進路の相談とか、乗ってあげているのを見たことがあるから、玲央くんを好きなのは美麗ちゃんだけじゃないと思うよ」

このセリフが私の感性に響いた。私はこの感情のせいで欲求不満になり、トイレに行つて、またリスカした。私はなんて弱いんだろう。あの子のほうが辛そうなのに何でリストカットするんだろう。加藤さんは励ましのつもりで言ってくれたのに、私はなんて心が汚れているんだろう。私なんか生きていいのだろうか。いいはずがない。

悩んでいると龍山が寄ってきて、語り始めた。

「佐々木梨沙とかいう変な女が、Dライオンの正体は鬼丸玲央じゃないかって言うんだ。当たり前だね」

「こっちも感じていたよ。リミカさんが佐々木さんだなんて」

「それで、その佐々木とかいう奴はもうすぐテスト通学をするんだって。それまでの獅子の手伝いをさせてくれっていうんだ。無論、小松真秀子のことだ」

テスト通学とは、不登校で入院した軽症な子が再び学校を通学できるかテストすること。私や玲央や龍山には全く無関係な話だ。

病棟ではDルームの集会があった。集まると看護婦が深刻な顔で話している。

「今日は性について話します」

大抵は性についてと言ったら体のしくみくらいだろう。中学にそういう話はちよつと言っていただろうけど、私は中学生の時、学校にほとんど通っていないかった。おかげで性の知識なんてほとんどない。看護婦の話を聞かずに眠っていたが、この話が耳に引っ掛かる。

「堕胎は殺人」

ここだけ、体のしくみの話ではなかった。

「命は女性の子宮からです。その中の胎児を墮ろす、つまり、殺すから殺人なのです」

何で、こんな話をするかわかった。小松さんが妊娠をしたんだろうか。何か事件があつたんだろう。私はそう悟った。少なくとも小松さんが暴行されたから、そんな人を少しでも減らそうとこういう話をするのだろう。

玲央が面接を終えて、出てきた。小松さんは、気が抜けた状態だ。

「玲央、小松さんは？ どうなつたわけ？」

「何で、お前にそんなことを言わなければいけないの？」

やつぱり、教えてくれない。どうしても知りたい。不幸を喜ぶんじゃないくて、仲良くなりたいたいから。小松さんと色々話したい。でも、私なんか友達にはしてもらえないだろうな。

「ねえ……玲央」

「何？」

「私が強姦されて妊娠したら貴方はどうするの？」

「……」

玲央は口を結んだ。

「答えてよ」

「お前の体は俺が守るから、安心して産んでくれ」

私は、玲央のその言葉を聞いて、大泣きした。玲央は抱きかかえてくれた。

佐々木さんと話をする様になった私。だが、友達といえるのは程遠いのだ。玲央から言われた“体を守る”と言うのは処女を守れ、つて事だと思う。小松さんのようにはなるな、ということ。

「どうして、鬼丸くと付き合わないの？ 仲いいじゃん」

佐々木さんは生き生きした顔で語っている。この子もそういう話が好きなんだな。私は彼氏だの、恋人だの、そんなのはどうでもいい。付き合いたいとか、そういうのじゃなくて愛という動機で大好きなあの人の幸せを望むんだ。佐々木さんは色々うまくし立てると、中学生なのにもう処女ではないということを明かした。

「ほらほら、あそこを見て、あの火傷の人、冬馬先輩に釘付けよ」冬馬とは私のことだ。「あの火傷の人」とは、龍山のことである。火傷だから、余計におかしい問題児などと言われる。龍山が病棟では問題児のレッテルを貼られている。その理由は、突然に笑い出したり、消灯後に一晩中“死にたい”と大声で言ったりした時があった。皆は嫌うが、私は好きだ。というか、大事な友達だから。ところで何で火傷があるのか、それは教えてくれないのだ。

「あの人って危ない感じだよ」私はムリ。でも、先輩は仲いいじゃん」

なんで、すぐ彼氏に結びつけるのだろう。この子の言うことじゃなくて、私は玲央の言うことを利きたい。

「どうして男子と付き合わないの？」

性関係は、宝物だと思うんだ。それを一時の感情で流されてはいけないと思うよ。だから、私は彼氏をつくらない方がいい。玲央から前にそう言われたことがあるかもしれない。玲央の言葉は、愛の言葉だ。本当に大事な人と付き合え、ということ。それは、あなたなのに。

佐々木さんがメンバーに加わろうとした。でも、私たちがみたいな不眠症の人についていけるのだろうか。無理だろう。私は薬を飲まなければ、朝の八時まで一睡も出来ない不眠症、龍山はオールナイトの回数は百回くらい、玲央は耐久を四十時間以上。佐々木さんに来るのだろうか。

夕方になり、玲央が落ち込んでいた。

「どうしたの？」

「なんで、こうなるんだよ……」

頭を抱えている。どうしたのだろう。

「お前には関係ないよ」

私じゃ玲央の悩みを解決できないんだ。

「小松さんは、彼氏と付き合っているときにもうすでに何回も堕胎しているんだよ……」

小松さんに彼氏がいるなんて初耳だ。

「さつき、あの子、彼氏に“汚れた女”って言われて逃げられたんだ。それだけじゃない。もっと可哀想な理由があるんだ」

「何？」

「それは……言えない」

玲央は、静かに帰っていった。世の中にはこういう子なんか沢山いる。だから、玲央は救いたい気持ちでいっぱいなんだ。

玲央は佐々木さんが加わるのを除外しようとした。玲央は佐々木さんに何やらまだまどくし立てた。しかも、その目つきの怖いこと。佐々木さんの事が氣にくわないのだろう。佐々木さんは患者の中でも軽症だから。多分、仲間に入るのも楽しそうだからという理由でしかだろう。私たちは遊びでやっているんじゃない。玲央のためにやっているんだ。

「何で、私じゃだめなの？」

この声あまり好きではないのだろうな。騒がしいし、私にとっても好意はわかない。佐々木さんはしつこく玲央に言う。聞いているのも嫌になってきた。氣をそらすため、違うところに行った。

小松さんが一人でいた。

「どうしたの？」

私は声をかける。

「私に何があったか知っているんだよね？」

小松さんは寂しそうに言う。

「私……昔、父親に性的なことで嫌がらせされて……自分が女なんて意識したくなくて……リストバンドしているところからして、薄

々感づいていたけど、冬馬さんって、リストカッターなんだよね？
何で、リス力しているの？」

「何でそんなことを聞くの？」

「あんな優しい鬼丸くんみたいな人がいてくれて、羨ましいな」
とても寂しそう。手が震えている。

「あのね、私ね、もしかしたら、あそこに行くかもしれない……」
小松さんはボーっとしながら、震えた指で天を差して言う。

「あそこ、に行きたいの？」

「生きたい」

一般的な“行きたい”と返す様に思えるが、私にとっては生死の“生きたい”と言っているように思えた。その言葉、捨てゼリフじゃないよね。“助けて”って見える。

小松さんは、気を失う様な顔をしていた。可哀想だ。今の可哀想ってままなら、卑下している意味での可哀想なので、安心する。でも、羨ましさの混ざった感情は少し焦りが出る。この子に可哀想であつてほしいのか、この子が玲央に好かれるがための哀れになるのが怖いのか。

「彼氏にも捨てられた。私は誰からも必要とされていないんだ……」
かわいそう。もう、この状態って世の中が自分に無関心って事だよ
ね。助けたくてしょうがない。この子をこんな目に遭わせる人が許
せなかった。この子がおか、した？　こんなになるまで悪いことを
した？　何にも悪いことしてないよ。玲央の気持ち痛いほどわか
る。玲央の志しの理由がわかる。この子をこんな風にした世の支配
者を恨むべきだ。でも、この子にはリストカットの痕なんてなかつ
た。自分の傷がたまらなく嫌になった。

「私の生きている意味を教えてくださいる人が一人だけいる……お母さ
ん」

それで十分だよ。良かったね。お母さんに愛されているなら良かつ
たね、って微笑む事が出来る。でも、玲央と一緒にいることだけは
許せない。どんな子でも。それがおそろしいことだとひそかに思う。

Dルームに集まって、看護婦さんが会議をやっている。小松さんが強姦されたことはあからさまにしていけない。皆は気付いているのに。「遠足が始まります。バス席を決めます」

何やら、遠足が始まるようだ。病棟でも普通にイベントがある。遠足なんかしてる場合ではないのに。玲央なら少なくともそう思っている。玲央の患者では、女の子が多いから、女好きか？　と思われるが、逆だ。玲央が女の子に恋心を抱くなんてありえないことだ。ということは、私も無理なのかもしれない。龍山には、サディズム可愛いという動機で苛める傾向がある。玲央は尊敬というか、大事な人？　兄と意識したことはあまりない。

ボーっとしているうちにバス席が決まった。小松さんと隣になった。なんかあんまり嬉しくない。嫉妬心を抱いている人とは隣になりたくない。好きじゃないんだけど、関心があり、意識しているからだ。玲央と龍山は隣同士。あの二人はやっぱり仲いいな。遠足のバスに乗るのが少し怖い。でも、まだまだ先だし。

佐々木さんとはどうしたのだろう。とても仲がよいように見えただ。結局はそれほど相性が良くないと思う。そうするとすぐに友達じゃなくなるのだろうか。それで小松さんは落ち込んでいるのだろうか。父親からは嫌がらせをされたけど、母親はどうなんだろう。誰がこの子を独りぼっちにさせたんだろう。庇いたくなる気持ちと可哀想にしたい気持ちも交差する。かなり複雑な心境だ。友達の多い小松さんなら大丈夫な気もする。やっぱり、この子が気になる。バスに乗ったときに話しかけてみよう。

でも、玲央に話しかけた。

「小松さんは……」

「また真秀子ちゃんのことか」

「真秀子ちゃん？　ちゃん？」

「患者の中ではかなり仲いいし」

「私には呼び捨てじゃん！」

「俺は、呼び捨てしている子の方がなれなれしい気がするけど」

安心した。あの子より、自分のほうが上だという気持ちになったとき、卑しい彼女が嬉しくなった。私こそ卑しい気がする。卑しい子に羨ましい気持ちなんて抱かない。

「お前、真秀子ちゃんを本当に気にしているね」

「正直に言うけど、小松さんに“可哀想”っていう気持ちと“羨ましい”って気持ちの交差しているの」

「意味わかんない」

「そうだよ、反対の意味の言葉だしね」

「相当、気にしているよね。そんなに気になるの？俺にとって、真秀子ちゃんは普通の子だよ。あんな子、患者ではいくらでもいるよ。お前が可哀想に感じているだけ。お前が世の中を知らないからお前のほうが変わっているよ」

本当に玲央に愛されているのは私なんだ。

「一週間後、遠足だからその考え無くしとけ」

でも、不安だよ。明らかに小松さんのほうが可哀想だし、玲央が小松さんと面接しているときにどんな楽しそうな話をしているのか。この気持ちは、複雑すぎるよね。

龍山の姿が見えた。何だろう。なんだか、私のほうを見ている。そして、あわてる。手を後ろで組んでいる。何かを持っているな。

サングラスだ。そして、自分の顔にかけて、口を開いた。

「どう？」

何が言いたいんだろう。サングラスをして、かっこいいって思わせたいのだろうか。何のためにそんなことを。それがわからない。私は何を言っているかわからず、疑問の顔をした。

「赤毛の娘」

赤毛って、私のことか。

「俺は、お前の血肉を食べたい」

何が言いたいのだろうか。グロイ。龍山は、野獣なのだろうか。

「君には、バラが似合うよ、ふっ……」

ますます、わからない。私は、自分の部屋に戻ろうとした。

「お前って、何だか、俺が中学の時の女と似ている。人形っぽい顔が」

何が言いたいんだろう。龍山の女ってどんな人だろう。想像がつかない。

遠足の日になった。小松さんと隣だ。小松さんの腕にもリストバンドがあった。疑った。消極的な話になるかもしれない。

「美麗ちゃん」

「え？」

「私、玲央くんがいたから生きていけた。玲央くんと、仲いいよね」

「玲央は貴方のことを本当に心配しているよ」

「私、死ぬのに？」

自殺願望か。そうは見えない。

「私、本当は……幸せだったのに」

小松さんは、リストバンドを外し、私に手首を見せてきた。とても綺麗な手首だ。この手首には何も痕がない。

「貴方はなんでリストカットしているの？」

大人しめの小松さんが強気だ。

「貴方は、何があって苦しいの？」

私を責めてくる。真に迫る様な目の訴えだ。

「私、汚れてるよね……翔ちゃんも私を捨てた」

翔ちゃんとは、彼氏のことだろうか。

「男って皆、女を体目的で支配する為の道具と見ているとしか思えない」

この言葉に胸が痛くなった。私も同じようなことを抱えている。生理とかブラジャーとか、そういうものがない男はやっぱり羨ましい。何かをやっていくにしても、男の方が自由はある。性のことで悩むのも女より少ない。私は生理になった度に切っていた。自分が汚れている様にしか思えない。子供の為にお腹を痛めて産めることが美しいこと、幸せなことなんて思えなくて。私には昔からトラウマがあった。母親から生理になったことや胸が膨らんだことで卑猥なほ

め言葉を言われたからだ。そのせいだ。女扱いされるのが恐ろしい。リストカットはそういう私の精一杯の証だ。女であるという事実に触れられたくない看板だ。

「美麗ちゃんってすごく不思議」

「え？ どこが？」

「よくわからないけど、なんか不思議って感じかな」

私は不思議に見えるのか。確かに昔はそうだった。学校では小学生の時に初めて苛められた。女友達なんていう存在は十六年、未だにない。恐らく、私は変わっているからだ。でも、小松さんはいるじゃないか。汚されたかもしれないけど、いるじゃないか。それが羨ましいと感じる部分の一つ。玲央に好かれていることももう一つ。

彼氏イナイ歴十六年の私にとっても、恵まれている。社交的なところが羨ましい。でも、汚されたことは、非常に可哀想だ。私はそんな目に絶対に遭いたくない。この感情が気持ちいいのか、苦しいのかわからないんだ。どこかに燃え尽きる嫉妬の炎が私の苦しみを燃やして灰にしてくれる。でも、嫉妬という感情は灰にはならない。きつと、物質ではないんだ。

「お姉さま。チョコレート食べる？」

小松さんの友達だ。友達がいるというだけで何故にこんなに妬んでしまうんだろう。

「亜紀ちゃん、ありがとう」

やっぱり、そのチョコレートを私には分け与えてくれない。やっぱり、これは私が違うタイプの人間だからだろうか。バスに乗っているとこういう孤独を感じなければならない。龍山とか玲央には気安く何でも喋れるが、この子には。せつかくできた玲央のような友達でも、男だから女子はきつと私を嫉妬する。私には女子の友達が出ないのに。

バスで、小松さんは“お姉さん”と皆に声をかけてもらえる。皆の様々な明るさは私には出来ない。皆で歩いていくとき、集合場所に皆が集まった。何気に皆は遊んでいた。

「冬馬さん」

佐々木梨沙だ。

「私、もうすぐでテス通なんだよね」
「知ってる」

「あ、あそこに龍山くんがいるけど」

「うん、そうだね」

「仲がいいよね？」

何だか、嫌な感じ。

「そうでもないよ」

「いつも一緒にいる風に見えるけど、林くんと鬼丸くん、本命はどっち？ あんな病棟の噂の二人に好かれてていいな」

ああ、やっぱり噂の中心か私たちって。まあ慣れているし、いいけど。

「龍山も玲央も友達なんだ」

「えー！ 付き合ってるのかと思った」

そういうのやめてよ、他人事のくせに。玲央がこの人をあまり快く思わない理由もなんかわかる気がする。なんかミィハーっていうか、そういう系の人って好きになれない。

玲央と龍山はからかいあっている。二人は仲がいい。あの二人の幸せなら望める。皆に出来ない私だけの繋がりであり、大好きな家族みたいな人たちだから。私は玲央たちを見て、微笑んだ。そして、小松さんに何故か目線がいつてしまった。小松さんにとつて、友達がちゃんとしても孤独に感じるのかな。私にとつては羨ましいけど。彼女は本当に骨に芯まで悩んだことがあるのだろうか。死にたいと悩んだことがあるのだろうか、私の様な孤独と言う地獄に。気になる。

「冬馬さん、お姉さんのことだけど」

「何？」

「元気がないよね。もう心が死んでいる感じ。可哀想で観てられないよ」

可哀想か。その可哀想は卑下しているのだろうか。それとも慈しみなのだろうか。玲央はたぶん、小松さんだけではない。可哀想な子を見てきたのは。きっと私にかまっている暇がないだろう。犯されたことをのぞけば普通の幸せな子だ。でも、私は玲央にみてほしい、愛されたい、世界で一番。私と可哀想な子、どちらが大事？

私は貴方の友達でしかないのだろうか。妹でしかないのだろうか。小松さんと玲央が話している。楽しそうな顔ではなく、真剣な顔でだけど。どうしよう、リス力しようかな。玲央に“死にたい”って甘えようかな。死にたいと甘えている時って幸せな気がする。相手に当たるとか、心配してもらいたいとかって、それってかなり嬉しい、幸せなことなんだ。自分が可哀想になりたいって、気持ちが起きていることは、周りに助けしてくれる人がいるわけで、幸せなことなんだ。もし、人に当たる人がいないなら、小松さんのいつているとおり、誰からも必要とされていない存在なんだ。リス力するのって、そういう意味なんだ。なんて醜い世の中だ。小松さんを傷つけたのは、誰もいない世の中の醜悪さだ。だから玲央も、世の人間をさげすんでいるんだ。玲央の気持ちがわかった。

「熱い眼差しだね」と佐々木さん。

「なんで!？」

「玲央くんに釘付けた」

私と玲央は異母兄弟だが、その事実に変な誤解を呼ぶので、秘密にしている。

「玲央くんと付き合ってるの？」

「なんともないよ」

「かっこいいもんね」

「違うって」

本当に違う。私の愛は恋心だけではない。兄妹愛に近いものであるが、変わった愛だ。複雑な気持ちなんだろうな。幸せを望むというよりも破壊願望に近いような。小松さんは玲央のことをどう思っているのだろうか？ 私のほうが大事にされている感じがするが、も

つと独占したいという感じ。愛を貰うための貪欲だ。

自動販売機のある休憩場で、玲央はまた気難しそうなことを考えている。と思いきや、自動販売機を蹴った。

「どうしたの？」

「どうもしねえよ」

「小松さんのこと？」

玲央は淡々と喋り始める。

「あの子、妊娠した」

妊娠？ 私は婦人科のことはよく知らないけど、大変なことはわかる。昔からよくテレビで痛そうに子供を産む女性を可哀想だな、って気持ちで見っていた。普通はお腹を痛めて産めることは幸せなことだというが。どうも、そうは思えない。

「俺はああいう子と沢山関わってきているから。お前はぜんぜんマシなだけど」

私が玲央に気に入られているのは、妹だから？ 重症な子だから？

小松さんは何にもないのに、玲央を惹くことができた。

「心配するな。俺が最も大事なものは、龍山とお前だけ。病んでいるだけじゃなく、血の関係のわけでもない。それもあるけど、俺が一番気に入っているのは、俺と似ていること。それに根本的な性格が一緒だから。可愛いとしか思えない」

安心した。ものすごく嬉しい。胸を撫で下ろした。

「真秀……じゃなくて、小松さんはただの患者だよ」

私は願った。小松さんがこれ以上、可哀想にならないで、と。思いやっているんじゃない、玲央に注目されないためた。ひどいことだっけわかってる。ごめんね、小松さん。

龍山が寄ってきた。

「あ、未来のミスユニバース候補の娘」

「はあ？」

「俺はお前のことを認めた。ミス日本になれるくらい魅力的な少女だ。お前は逸材だ」

「そんなに大それた人じゃないからさー」

玲央は鼻で笑った。この三人ですつといられる時間が欲しかった。でも、こんなに個性的な二人は周りが黙っちゃいない。

玲央は小松さんのことを心配している。でも、二人は相談しあう仲でしかないのかな。そうであって欲しい。玲央にとって、愛している最後の人になりたい、心に残っている人になりたい。誰よりも。

玲央にとってだけでいい。玲央にとって、私は一番になりたい。妹だからって、甘えている。

病棟のメンバーで、森を散歩することになった。小松さんは、玲央の隣にちゃっかりいる。彼女はそんな気はないんだろうけど、私には図々しく見える。

「玲央くんも美麗ちゃんをいつも気にしているよ」

加藤さんは私の気持ちに気付いて声をかけてくれた。

でも、なんだか私にとってむかつく。小松さんは、玲央の腕にしがみ付いている。私の心臓に緊張感を漂わせる。彼女にとって、この苦しみを心配してくれるのが、玲央しかいないんだ。だって、あの言葉“誰から必要とされていない”と言っていたんだもの。私と同じ。抱えてくれるのが、玲央しかいないんだ。玲央がもう愛そのものみたいだよ。佐々木さんが言っていた、“鬼丸くんはヒーローなの？”という苦々しい質問を思い出した。玲央は小松さんの悲劇を思っただけでいる。物に当たるほど怒っている。

小松さんの歩いてきた足が止まった。

「どうしたの？」

「怖い……」

小松さんはふるえている。トラウマだろうか？

「大丈夫？ 小松さん。俺の背中に乗って」

私はもどかしかった。玲央の後ろに乗るなんて私の憧れだった。また切りたくなかった。涙が出てきた。私も可哀想になりたい。可哀想になったら、玲央にも感心されるんだ。お姫様抱っこだって、背中に背負われることだって、何だって出来てしまうんだ。

「鬼丸くんが私なんかに触ったら、汚れちゃう、よ」

「汚れてないよ。小松さんは綺麗だよ」

小松さんはふるえながら喋っている。私は思う、もっと可哀想になりたい。小松さんがどれほど辛かったかも知らずに。

「私、また墮胎しようと思っているの」

「俺は産んでやってくれ、って意見なんだけど」

「私の体だよ。墮胎しようが勝手じゃん。大体、命なんて、軽いものだよ」

もう、自暴自棄の塊だ。私は他人事みたいに思ってしまう。醜い。

玲央は、「そうか、ごめんな」と少し残念そうだった。気持ちを察したのか、これ以上、責めなかった。でも、墮胎って、人間を殺すほどの罪なんだよ。その子は、小松さんだけの命じゃないんだよ。玲央もわかっていると思う。

無事に病棟についた。私はすぐにカッターを持って、トイレに行った。どんどん傷が深くなっていく。でも、こんな気分にいるよりはマシだ。

「美麗！」

Dルームに出てから、玲央の声が聞こえた。私は焦った。

「また、切ったのか？」

「……うん」

玲央は、衝撃的な顔をした。でも、すぐに微かに寂しく笑った。

玲央に嫌われるだろうか、感心されるだろうか。リストカットをして、感心を誘おうなんて私は最低だ。

「鬼丸くん、美麗ちゃん」

いきなり佐々木さんが現れた。

「鬼丸くん、梨沙は鬼丸くんが部屋でこっそり何かをしているのを知ってるよ。何をしているの？」

「そんなのお前に言えるわけがないだろ？」

玲央は、佐々木さんには冷たい。でも、誰にでも優しいのよりはずつといいし、それの方がなんだか嬉しい。玲央と分かり合えるのは、

心の綺麗な人だけだと思うから。昔から玲央に憧れていた。玲央は苛め的なことはされなかったが、いつも孤立している。でも、誰よりも自分を持っていて、学校の成績も余裕でトップだった。勉強のできる玲央は皆から一目置かれていた。

「私もそのグループに参加させてよ」

佐々木さんがそう言うのと、玲央はすぐに口を開いた。

「やだね」

やっぱり玲央はミーハーな人は嫌いなんだ。というか、世の人、ほとんどもが嫌いなんじゃないかな。テスト通学なんて、私たちには程遠いものだし。この人ならすぐに周りの人にこのことを話すだろうな。

「じゃあ、周りの人にこのことを言うよ」

「あんたは、俺たちが何をやっているか知らないだろ？ その情報を広めても俺たちには何のデメリットもないね」

「ちえー……」

それにこの子、もう少しで関係なくなるしね。

「いつか、あんたを後悔させてやるから！」

「あんたには無理だねっ」

玲央は強い。私ならすぐに流される。相手を心配して、相手が可哀想に思えて、強いことを言えない。ただ私も正義感は強いけどね。次の日の朝になった。私はあくびをしながら、Dルームに来た。すると、周りの人が、じろじろ見てきてこそこそする。私は無視して座った。

「昨日もやったのか？」

男子の一人がそういった。

「なんのこと？」

「とぼけてんじゃねえよ。夜に鬼丸のところ行ってただろうが。一緒に寝たのか？ ふしだらな女だな」

馬鹿。私がそんなことするわけない。玲央はむしろ逆で、守ってくれるような人だもん。からかう子供のいい加減な噂だ。

「違うから。そういう妄想やめてくんない？」

玲央は冷静だ。私はそんな自信がないから、そういうストレートに言うのは無理だ。そういうところからして敬愛すべき人だ。病棟で関係を持ったなんて知られたら大問題だ。どうしたらいいの。誰が噂を流したのだろう。

「あいつだ」

龍山が何やら言い始めた。龍山は頭をかきまわす。フケが落ちる。

「俺の感受性はあの女の行動範囲を把握している。おそらく、あの佐々木梨沙とかいうあの女は、口が軽い」

なんだか、何が言いたいのかわからない。龍山って、話し方が変なんだよね。独りよがりって言うか。

あのネットのリミカさんは、佐々木梨沙である。あの時の相談しに来た発言を聞いて、あの子は大変だと思う。でも、玲央はあの子の根本の性格が嫌いである。だから、優柔不断であり、自分を犠牲にし、自信のない性格の小松さんには異様に優しいんだ。それが、嬉しいようで辛くてたまらない。玲央は結局、優しい純粋な性格の人が好きなんだ。ということ、世を蔑んでいる玲央から見れば、世の中の皆が汚れているということ。だから、小松さん、貴方は汚れてなんかいないよ。私は玲央がいるから自分に自信を持てる。

私は、夕方に一人で散歩していた。徐々に病棟から出るのもいいだろうから。食品売り場を回っていたお父さんから貰ったお小遣いでお菓子を買う。スーパーを歩いていると、子供がいた。中学生くらいだろうか？ 近くに寄ってくる。

「貴方は精神科医の鬼丸俊輔さんを知っていますか？」

それなら、私の父です、と言いたくなかったが止めた。鬼丸が父と兄の名前なら冬馬である私は複雑な家庭の事情があるとのめかすことになるからだ。

「その精神科医、どここの病院の人かわかる？」

「アロン病院です。僕も入院するかもしれませんが」

「なら、案内してあげるよ。おいで」

なんかこの子、母性本能をくすぐらせる感じの子だ。小学生で入院なんて苦労しているのかな。

「名前を伺ってもよろしいですか？」

「美麗。冬馬美麗よ」

「名前の通り、美しい方ですね」

なんかお世辞を言うのが上手い子だ。親はどんな人なんだろう。一緒に歩き始めるとある質問をしてきた。

「鬼丸俊輔さんの息子の鬼丸玲央さんって、Ｄｒライオンって、サイト開いていますよね？　僕の知り合いが、玲央さんのサイトに訪問して、玲央さんに困ったことを相談していたことがあってですね。精神科で直接的にお会いしたことがあって……」

この子のセリフはどこか回りくどい。

「で、僕も玲央さんに会いたくなって……」

要するに玲央に会うために精神科に入院するわけか。ファンか。でも、精神的に病んでいる子なら、入院するのもぜんぜんおかしくない。ただ単に玲央に会いたいって言うなんて熱狂的なファンだ。

「いつか、僕もアロンに入院しますから」

可愛い子だ。

「入院したら、仲良くしようね」

「……貴方、異様に純粹ですね」

帰ろうとしたら小松さんがいることに気付いた。小松さんは、焦っているようで、店員が現れ、連れ出されているところを見た。

万引き？　私は追いかけた。

「店員さん、やらせてあげるからこのことはナシにして下さい」

なんてことだ。私は何にも出来なくて、怖くなってきた。あの子がこんなことをするなんて、信じられなかった。

私はすぐに走って、病棟に帰った。

「玲央、あの子が！」

「なに？　小松さん？」

私は何も言えずに部屋に戻った。あの子は、もう心は死んでいる。

あの時に言った“自分は必要とされていないんだ”という言葉がこのことをほのめかしている様にも思えた。もう、小松さんは、レイプ犯に汚されて、脳を洗脳された様な感じた。可哀想っていうか、世の中の醜悪さが怖くなった。

玲央に尋ねると更に酷いことを聞いた。なんと、また小松さんはまた墮胎しまくっているのだという。

「私ね、あの子のこと知ってるの。あの子ね、店の人と売春してたの」

「知ってる。あの子は俺にいうんだ。“私、もういつ死んでもいいんだ”って。生きているのなんてどうでもいいって。生きていても死んでいてもどちらでもいいって」

酷い。でも、小松さんが不幸になれば不幸になるほど玲央の感心が深まる。

だが、そんなことより、私が思う、生死がどつちでもいいなんて心境が、私を玲央の信者にしてしまっているという気分だ。私は泣いて泣き続けた、玲央は言った。

「お前だけは、そんな姿になるなよ……」

それから夜になった。さつき、言った言葉が心に響く。この言葉が脳にしみついていつもと違う感じで布団に入っても眠れなかった。このセリフは小松さんより、私を選んでくれたってことだね。小松さんは私の何よりも勝っていないだろうな、それだけで十分だ。こんな風に甘えて、こんな風に嫉妬心の嬉しさを満たして、私はなんて汚れているんだろう。小松さんじゃなくて、私が汚れている。血のように気味悪い気持ちだ。いつも血を見ている私ならわかる。リストカッターの子は死にたいなんて思っていないはず。私がそうだ。自分が嫌いで、その嫌いな自分が思い通りにならないから切る。自分が女であることがもどかしい、気持ち悪い。月経が起くる自分が嫌いだから、切る。自分は子供を産む体なのか、という事実が嫌で、切る。

この気持ちに龍山や玲央にわかるだろうか。わかるはずがない。男

と女は全く正反対の生き物と言っても過言ではない。そのはずなのに惹かれあうなんてどこおかしい。でも、嫉妬心で切るのは初めてだ。違う甘えができるから。

月経のない男は羨ましいが、性差が頼もしく見える感じと似ており、悪くはない。自分が女だと自覚するのが、楽になるときがある。

夜になった。こんな風に考えていると空想の世界って永遠なんだ。小松さんのことが気になっていて、眠れない。

私は小松さんが部屋に入るのをみた。私みたいに眠れないのかな、って気になってのぞいてみた。

「小松さん」

彼女はぐっすり寝て、静かに寝息をたてていた。

「お姉さん寝ているんだから静かにしてよ」

羨ましかった。彼女は辛いことがあっても眠れるんだ。それならいいじゃない。それに私のほうが哀れだったりして。他の人に言うところ「怠慢だから眠れないんだよ」とか言われる。そうじゃない。私は辛いことがあったから、眠れないんだよ。よく、人は他のところじや何があるかわからない。だから「貴方が凄く苦しんできたとは言えない」とかいう。私はその言葉が嫌いだ。それから、私は目つきが悪くなってきている。これが、私たちの辛い証拠。小松さんは私とは違う、絶対に違うんだ。それだけは譲れない。普通なら、私たちみたいな経験をした子なら、少しは強さである、人から左右されないという、影響力の自制心の強さがつかないかな。貴方たちにはわからない。……だから、大嫌いなんだよ。

夜に考えた。思い出した言葉がある。玲央が言っていた言葉だ。世の中は許せない。可哀想な子、弱い子、優しい子を自殺に追い込むから、と。私も決して、苦労していないとは言えない。精神科に入院している子が病んでいないとでも？ リストカッターの子が病んでいないとでも？ 私は、玲央に好かれる特質を見つけられたんだ。手首の傷も、浮きやすい雰囲気も。世の中に認められるよりよっぽど良い特質だ。玲央はいつも机の隅で哲学書を読んでいて、孤立し

ている。いつも「何で生きているの？」と考えているが、誰よりも愛ある人だ。世界で一番大事な人だよ。玲央に愛される為なら、何でもするよ。

そういえば、小松さんは玲央に何でも話すところがある。看護婦に教えざるを得ない強姦の二ユースの件について。何故か噂で病棟中に広まった。その時、真っ先に玲央にいつも相談している。こういうとき、同性で友達の佐々木さんより、頼りになる異性の玲央の方が楽に打ち明けられるのかな？ それをみて、私は少しレイプ願望がある。死にたい時なんか、玲央にレイプされて殺されたらどんなに楽かって時があるもの。こんなこと、よっぽど信じられる人にしか言えないけど。マゾヒストだからなのかな？ 処女のくせに。

世の中ってこんなことがあるんだ。小松さんを見て、勉強になった。世の中って醜悪だよ。おぞましく汚いよね。さっきの感情が芽生えないようにするしかない。世の人とならないために。

Dルームに行くとき玲央がいた。

「どうしたの？」

「いや、美麗にだけ言う。小松さんが可哀想でさ。俺の家に来た昔の同級生がアダルトビデオを見ていたんだよ。それで、女性をレイプするシーンがあつて、俺は泣いた。おもちゃの様にされた女性がどんなに苦しいか。辛かったか。セックスは愛だ。それをあいつらは、醜く変えた。それが許せなくて……」

玲央は優しい。私なんかよりもずっと心が綺麗だ。まだ小松さんは中学生。これから先にまだまだある年齢。その女の子を肉体的に支配する。玲央のような人が沢山いたら、この世界は、良くなっていたかもしれないね。

「俺、お前がレイプされているところを見たら、そいつを絶対に殺してやりたい。そいつが世界一許せない」

玲央が私に体を守ってやるから産んでくれ、っていう言葉をまだ覚えてるよ。凄く嬉しい。玲央なら、私の処女を守ってくれる。

そっいえば、玲央は傷ついている私にこういうことを言ってくれた。

「クソみたいな奴の言葉なんか聞かなくていい。好きな奴の言葉だけきいていればいい。お前を大切にしてくれて、わかってくれて、愛してくれて、そういう奴にだけついていけばいい。嫌な奴の言葉は雑音だよ」と。あれは私を愛してくれているから言えるんだよね。過去の同級生に暴言を吐かれた。精神的虐待だ。そのせいで、重い精神病を患った。でも、それだけじゃない。私は感受性が非常に高い。そのせいで、毎日が苦しかった。外に出るだけで、錯乱状態。玲央がいなきゃ私はもう死んでいた。本気でそう思う。だから、私の命は私の命ではない。玲央の命。だから、玲央に殺されるなら本望だ。私はもう、玲央に人生を捧げたい。死にたい時は本当に玲央が私をレイプして殺してくれればいいのに、って本気で思う。これがかもしきたら一番の幸せ。そうなれば、私はもう何もいらぬ。永遠の、命さえも幸せさえも。

Dルームに行くと、佐々木梨沙がいた。なにやら不敵な笑いを浮かべている。この子、看護婦さんにはとてもいい子だと思われる。が、私はそうは思わない。感受性で何か恐怖を感じる。なんだろう。「冬馬さん。ご機嫌如何でしょうか？」

何か変なことをたくらんでいる。私がいくらマゾだからって、誰にでも苛められていいわけじゃない。

「その服、ダッサー！」

「ダサいって、何よ」

「ちよっと可愛いし、ちよっとモテるからっていい気になるんじゃないわよ」

私がモテる？ そんなわけはない。私の容姿はそんな特別には良くないし、玲央とつりあうとも思わない。

「あのね、鬼丸くんはお姉さんが好きなのよ」

お姉さん？ 小松さんのことか。

「鬼丸くんは、貴方の事はこれっぽっちも好きじゃない。鬼丸くんは優しいから言えないのよ。色目つかってんじゃないわよ」

それは、なんとなくそう思う。玲央は小松さんが好きだと思う。凄

く優しいもん。私には、凄く意地悪なところがあるし。

朝なのに、看護婦さんもいない。まずい時に来ちゃったな。こういう人はきつと龍山をも苛めるだろう。

「私のこと、嫌い？」

「嫌いつて言われた時の衝撃が大きいから聞かないほうがいいよ」

嫌いつてことじゃん。嫌いならはつきり言えばいいのに。加藤さんがやってきた。

「加藤さん。おはようございます」

この子、いい子ぶっている。表現が大げさだ。自分の語っていることがわかっていいるのだろうか。思慮深さが足りないのではないかな、って微かに思っている。加藤さんならこの子がいい子じゃないっていうのは、わかっていると思う。でも、看護婦さんだし、患者を手荒に扱ってはいけない。でも、何でこの子が入院してきたんだろう。十分、やっていけるじゃないか。それほど苛めとか差別とかが珍しいことじゃないってことが。

佐々木さんの様子を見た。この子は、どこか変だ。何故かというといつも気が強そうな子といる。鎧崎さんみたいな強そうな子を盾にする様な感じで。

私を通りかかると佐々木さんは、私を見ながらこそこそする。これが、悪徳の罫。でも、皆は人数がいるから、そんなには悪いと思っ
ていないことだろう。私の一番嫌いなやり方。

Dルームに呼び出されたときも、私はいつも姿勢が良く、態度がいい。佐々木さんは、私と近い席。何だか嫌だな、見てきている。

「何で、いつも独りでいるの？」

貴方にはわからない。私の気持ちは。

「独りでいて楽しい？」

楽しくはない。

「何で、堂々としてられるの？」

次々に聞いてくる。話中も鈍感な（または、立場の低い）看護婦さんだから、お構いなしに。

「私は皆と同じことをしていた方がいいと思うな」

「私は、そういうの大嫌いだから！」

少し大きい声で言ってしまった。

「馬鹿じゃない？ 独りでいるのもむきになるのも」

この人には何を言ってもわからない。私は私、貴方は貴方。それは、それで、ちゃんとやっていきましようよ。

佐々木さんと他の女子が小さな紙きれを回している。なんだか嫌だ。こういうのを平気でやっているこの人がわからない。目立つ私が嫌だとしても。個性を保つことは、授業態度を悪くするより罪の重いことのように感じる。

龍山が何やら、ルービックキューブをいじっている。いつもの行動だが、やっぱり、高速で動かせる龍山は、変わっている風に見える。私は、可愛い龍山を嬉しそうに観ていると龍山に佐々木さんが近づいていった。

「林くん。お願いがあるんだけど」

「何だよ？」

「林くんって汚いから、近寄らないで欲しいんだけど」

なんか、変なの。玲央に打ち明けてみよう。

玲央に打ち明けてみた。

「あの人、強迫性人格障害だよ」

「キョウハクセイ人格障害？」

「潔癖症のこと。きっと、龍山みたいなちよつと不潔っぽい人を蔑んでいるんだ」

そういうことか。それが原因で入院してきたのだろう。だって、変だと思ったんだ。友達もちゃんとして、安定しているのに死にたくなったりするってことは、潔癖だったんだ。そうなんだ。

「俺は、そこは同情する。けどな、龍山を蔑むのは許さない」

私も同意見。様子を見ると、佐々木さんは、龍山から離れていき、龍山の座るところを避けるようになった。

「林くんのところ、汚いから座らない」

龍山を人間として扱っていない。ばい菌扱いだ。龍山は、気付いていないが、知ったら傷つくだろう。私が普通に座っていると、佐々木さんの会話が聞こえてきた。

「亜紀ちゃん、林くんのそばに寄らないでね、林くん。汚いから」「きつと、近くに寄ったら、フケ症になるとか？」

「もう、ばい菌そのものよ」

私は、腹が立つてきた。しばらく経つと、龍山は、ばい菌扱いされていた。佐々木さんが、龍山「ばい菌という扱いをしたから、男子も女子も龍山をばい菌扱いする様になったと私は思う。」

「あいつ、フケだらけだよな」

「汚いよな」

同じ人間じゃないの。この人たちは、龍山に触れて、ロンシャオ菌と名づけ、うつして遊んでいる。龍山が近くに寄ると、

「うわっ！ きたねえ！」と男子。

男子たちは、龍山から離れた。女子もたわむれて、あれこれ言う。この場の雰囲気がおかしくなっている。女子たちは笑っているが、私には全く笑えない。皆が龍山を特別視して、注目の的にする。

龍山は立ち上がった。

「なんで……俺がばい菌扱いされなきゃいけないんだよ！」

龍山は怒っている。

「汚いから」

「不潔だから」

皆が声をそろえる。龍山は、俯く。私は、怒り出した。

「いい加減にしてよ！」

そして、私は立ち上がった。

「問題児がうつると思って」

「俺から、すればお前らが問題なんだけど」

玲央は、冷静に言った。今まで、哲学書に夢中で全くこの空気に参加していなかったのに。今も哲学書に夢中で、普通に喋っている。

「自分はこいつらとは違うとか、マジで中二病だから」と、男子た

ち。

玲央は、こいつらを無視して、龍山の席に移った。そして、龍山の肩を触った。

「お前は、汚くないよ。何の害もない。同じ人間だもんな」

そう言つて、にこつと龍山に優しく笑つて言つた。その後、席に戻つた。

「うわっ！　どんだけ自分を特別だと思っているの」

玲央は、哲学書に夢中で、耳を傾けなかった。玲央は、この人たちに全く動じない。こういうところが大好きだ。自制心があり、堂々としていて、全く左右されていない。龍山もルービツクキューブに向かつていった。この空気を見て、勝った様な雰囲気になった。そうだ、玲央にかなうわけがない、こんな人たちが。

今後も龍山のばい菌扱いは変わらなかったが、龍山も動じなかった。こういうことに慣れているんだらうか。私だけ、いらいらしているのだらうか。龍山と玲央の友情は、謎が多い。

何気なく、佐々木梨沙が話し掛けて来た。

「冬馬さん。裏則やぶってるよ」

「ウラソク？」

「知らないの？　この精神病棟の法則だよ。いつも、男子と一緒にいるみたいだけど、高校二年生以上にならないと駄目なんだよ」

この法則、きつとこの人たちが勝手につくつたのだらう。病棟にこんな決まりがあるなんて、加藤さんは言つてなかったもの。

「何で、貴方たちの言うことを、きかなければいけないの？」

「規則ですから」

やっぱり、同年代は幼稚に見える。男子に近づいてはいけない。これは、被害妄想かもしれないけど、私を陥れる罠みたいだ。

「とにかく破つたら先輩から目をつけられるよ」と、捨てゼリフを言つて、去つていった。

厄介だな。こういう法則つてどうも嫌だ。でも、私は貴方たちが大嫌い。とにかく嫌い。だから、貴方たちの言うことはきかない。

私は、平然として玲央や龍山と話していると、女子たちがこつちを見る。その様子がかなり不気味だ。嫌な雰囲気だ。こそこそしている。龍山は、

「なんだ？　まるで、フクロウだな。フクロウアマゾネス！」

この発想が凄い。アマゾネスなんていう発想は、ちよつとインパクトがある。それにつられて、哲学書に夢中だった玲央は女子たちを何気なく見た。

「何？」

玲央は、女子たちに言った。ちよつと感じが悪いので、女子たちは気まづくなつて、女子棟に帰っていった。とにかく、私も群れて安心する貴方たちは大嫌い。

そのうちに裏則のポスターが出来た。一、年上に会ったら挨拶をする。二、高校一年生以下は、消灯後に部屋から出ない。三、高校一年生以下は、男子に近づかない。これを破ると仲間外れにされます。全て、いんちきな決まりだ。病棟にまでこういう決まりを。私はかなりムツとなった。そういう顔をしたからなのか、加藤さんがやってきた。

「看護婦さんはだめって言っているのにきかないのよね」

「やめさせてください、こんなの迷惑です」

少し、涙目になって言うとか藤さんが、

「守りたくなかったら守らなくていいのよ」

あまり、親身になってくれない。残念だ。でも、男子に近づいちゃいけないって、玲央に近づくな、ってことだよね。

「もう、これで夜、鬼丸くんの部屋に行けないよね」

物凄く嫌味な声で言われた。佐々木梨沙だ。

「夜に部屋に行っているなんて、やっぱり、やっちゃったんでしょ？」

「何もないよ」

「携帯のことを知られているから言えないけど、いつか、絶対に後悔させてやるから」

決まりを作ったのもきつと、佐々木さんだ。私を外すためか何だか知らないけれど。もしかしたら、被害妄想かもしれないけどね。

私は絶対にこの決まりを守らない。貴方たちのつくった変な決まりは守らない。

玲央は、私のことを「宝」と言ってくれる。そんな玲央が大好きだ。でも、世の人は私を「変わり者」とか、「お前なんか」とか、「イカれている」とかいう。だから、私は世の人が嫌い。決して好きではない。好きになることは今までもこれからも決してない。それに私は貴方たちの様にはなりたくない。貴方たちは、一生、人を迫害して、楽しんで、人生を送るでしょうけど、私は玲央と生きる。この考えは変わらない。貴方たちはしょうがない。そういう風に生まれてきてしまったんだから。責めないけれど、私は貴方たちを軽蔑します、心の根本から。

高校二年生の先輩が通りかかった。流石に緊張するというか、胸が張り裂けそう。私は、無視した。というか、いつも通り、普通にしたら、通りかかっただけで、しかも、仲も良くない人に挨拶をしなければいけないの。私が通り過ぎると先輩たちは、私を見ながらこそそとする。完璧に私は孤立している。

私には玲央がいる。私には、聖書がある。だから、私は貴方たちなんか気にならない。

龍山がいた。

「赤毛の娘」

いつも通り、変わった口調で話しかけてきた。

「お前、女にいびられているな」

「それが、悪い？」

「大丈夫。俺も問題児のレッテルを貼られている。お前は、俺に比べりゃ塵のようなもの」

なんか、オチのない違和感のある喋り方だ。そこが可愛いと思う。龍山は、可愛いけれど、体つきが男らしくて怖い。実は、龍山ってなんなんだろう。変わっているけど、どこらへんが。どこらへんが

変わっているんだろう。たまに普通の人間のように感じるときと、全く違う野獣の様に思うときがある。不安定だ。

最近、小松さんの顔を見る機会が少なくなった。佐々木さんは相変わらずよく見るけれど。女子の人間関係って難しい。私は玲央や龍山と同じ、男だったら良かったな。小松さんを見ていないせいかりストカットの痕が治癒されていた。傷が愛しい。これが、私。傷があるのが、私自身。トイレに行って、自分の顔をながめた。あかんべしてみると、赤くなかった。リストカットしているせいで、血が足りなくなってきた。相当、切ったな。これから切らずにすむ、解決策はないのだろうか。切らなくなってから、血が減っていることに気付くなんて遅すぎる。玲央は私がこんなに惨めな姿になるのを望んでいない。自分を大切にしていない私は、きつと卑しい人間なんだ。

落ち込んで一〇八号室に戻った。リストカットをする人は、とても優しい子だと言う人がいる。本当にそうなのだろうか。嫉妬深い私は、綺麗な人間なのだろうか。リストカットしている限り、自分を綺麗な人間なんて思うことは決してない。玲央の言葉を思い出した。「美麗は、凄く綺麗だよ。外見ももちろん可愛いけれど、精神的な意味で、綺麗で可愛くて、美しい人だと思うんだ。それを忘れないようにね」と。その言葉が宝物で、お世辞でも嬉しかった。でも、お世辞には聞こえなかった。それで、玲央しか見えなくて。玲央しか私を理解してくれなくて。玲央になら、処女をあげてもかまわない。いつだって。

「また、あの人といたでしょ？」

考え込んでいるうちに食事の時間になり、隣には佐々木さんがいた。「裏則やぶったら目をつけられるのに、なのに、破っているってどういうこと？」

男子に近づかないということも裏則の決まりだった。

「佐々木さんは、苛められるのが、怖いのか？」

「……怖くないよ！ でも、これは決まりだから」

少しだけど、佐々木さんを手玉に取った。

「冬馬さんって、すごいうざい！」

それは、貴方にも言えることでしょ？　　と言おうとしたがやめた。その後、私は、部屋に戻った。なぜか、よく眠れた。

夜になった。佐々木さんは、皆と話し合っている。女子が集まって集会みたいなのを行っていた。女子の一人は、私を呼んで、話に参加させる。こういう人たちって、どうなんだろう。ただ話をしたいだけ。

「冬馬さんなんて、呼ばなくていいのに」

佐々木さんが口を開いた。聞こえないように言っているが、聞こえている。無駄だ、私の感受性はそんなに鈍くない。

「初体験は？」

また、こういう話。高校生の患者が口を開いて言う。中には小学生の子もいるのに。

「美麗ちゃん？　玲央ちゃんと付き合っているんでしょ？」

「そういう話なら、帰るよ」

「まあまあ。参加してよ。玲央くんのこと話すの」
何だろう。

「玲央くんって恋愛に全く興味ないんでしょ？　私、玲央くんとエッチしたい」

私はいやだ。玲央と寝るなんていやだ。でも、嫌というより、殺されたい。一番、嬉しいのが無理やり襲われること。もう、私の尊厳を玲央によって、打ち消して欲しい。でも、こんなこと、誰にも言えない。

一瞬、リアルに想像した。玲央が私にやけに優しい甘い恋愛環境。私の上に玲央が乗っている。そして、私の顔を両腕で押さえながら自分の顔を近づけて、優しく接吻する。でも、性欲の薄い玲央が、私をレイプするなんて、絶対にならない。小松さんのことだって、あんなに怒っていたんだもの。少なくとも絶対にそんなことはしない。
「顔、真っ赤だよ？」

しまった。皆の前だった。

「キスしたの？」

「そんなのしてないよ」

女子たちは興味津々だ。私は沈黙すると、女子たちも沈黙した。すぐに話題を変えた。話なら、何でもいいんだ。

「コンドームってどこで売ってるの？」

「まーた、こういうことを。足音が聞こえてきた。」

「そういう話しているなら寝なさい」

看護婦さんがやってきた。女子の一人があくびをかいいた。

「もう、寝よ」

もう、あくびが出るんだ。私なんか、たぶん、薬なしなら明日の朝まで眠れないだろうな。

明日の朝、小松さんの様子を窺った。やっぱり、心配だし、最近、佐々木さんと小松さんが仲の良い感じはしない。気になった。探る尾行って奴だ。ただ、私はスパイのプロではない為、すぐに見つかってしまっただろう。

小松さんは、いつも歩き方に自信がない。私は、自尊心が不安定だ。でも、この子はいつも自分に自信がないのか。小松さんは、売店に向かった。今度は、万引きしないと思うけど、どうなんだろう。

小松さんは、普通におにぎりを買っていった。尾行って変かもしれないけど、どうしても気になるの。小松さんは、病院から出ていった。

「お父さん！」

お父さん？ お父さんか。小松さんはどんなお父さんなんだろう。よく見てみた。何だか別に似ていない中年のおじさんだ。

「真秀子ちゃん、ボブの髪型が相変わらず可愛いよ」

「お父さんのためにボブにしたんだよ」

ひらめいた。これは、小松さんのお父さんじゃない。流行語大賞にも選ばれた言葉である援助交際、の相手だ。でもそれは、犯罪だよ？ だって、まだ小松さんは、中学生だもの。そうだったね、父親

が性的虐待をしたんだってね。それじゃあ、そういう道に走っても仕方ないか。これを玲央に知らせるべきであろうか。玲央なら、小松さんのことを心配するに違いない。でも、言わないわけにはいかない。私の嫉妬心と正義感が葛藤する。玲央ならば、援交の相手の小松さんから離れさせるだろう。小松さん、その人はお父さんではないよ。貴方の体が目的なんだよ。貴方の体は今の段階では貴方だけのもの。そうでしょ？ 本当に好きな相手にその体をとっておくんでしょ？

私はそのまま病棟に帰った。私は、親から虐待を受けたこともない父親に性的な嫌がらせをされたこともない。だから、援交したい気持ちなんてわからないし、絶対にしたくない。玲央は私が援交をしたら殴つてもやめさせるだろうな。これを愛というのだろうか。私の玲央への愛し方は歪んでいる。玲央に叱られたい、思いつきり怖い顔をされて殴られたい。もう、玲央になら何をされてもいい。

「お前、なんか最近、様子が変だぞ？」

「大丈夫だよ」

「本当に大丈夫か？ リス力はしてないか？」

玲央は私の体をいつも思いやってくれる。

「ねえ、玲央」

「何？」

「援交するって気持ち、どれくらい辛いの？」

「お前、援交したいの？」ちよつと、からかうように言う。

「そうじゃなくて」

「誰かがしたのか？ そういう噂が流れているのか？」

玲央は、鋭い。感受性が高いからだろうか。

「小松さんが」

玲央は驚いた顔をした。玲央は、本当に可哀想な子を愛している。自分も似たような経験をしているから、放っておけないんだ。可哀想ってだけならこんな風に来ない！ 玲央は口を開いた。

「あの子、かわいそうなんだ。父親が、」

「知ってるよ！」

玲央も私も沈黙した。何で、世の中はこんなに無慈悲なんだろう。小松さんは、夜になっても帰ってこなかった。看護婦さんが心配している。施設に入って、友達もいるのに、夜で遊ぶ。よほど父親が与えた傷が大きいんだ。こんなになるまで追い詰めて、私は許せなかった。やるせなかった。助けたいけれど、私は無力だ。

「真秀ちゃん、どこに行っただろう」

看護婦さんに言ったら、大騒ぎになっているよね、援交をやっているなんて。玲央は、言った。

「美麗、お前もし、自分に似ている子が苦しんで、それでも助けられなかったらどうする？」

何かの比喩だろうか？ ううん、疑問系じゃなくて、ちゃんとわかる。

「小松さんのこと？」

「そう」

「そこまで人を好きになったことないからわからない」

私は、正直に言わなかった。玲央のことだと思ったから。でも、後から違った。玲央じゃない。玲央は、似ているとかよりもこの上ない愛。敬愛、慈しみ、盲目の恋。最後の盲目っていうのは、外見に惹かれているから。破壊的だし、愛のまがいもの。こんな心を抱いているなんて。玲央は、私に愛なのに。

精神病棟の入り口のドアのベルが鳴った。小松さんは、夜になって、帰ってきた。

「お姉さん！」

女子棟から、佐々木梨沙を含め、女子が寄ってきた。小松さんは、玲央を見て、玲央に飛びついた。玲央は、びっくりする。

「私、幸せになれたよ。やっと、一緒に生きていけそうない人に会えたよ」

玲央は小松さんの耳元の小声で言った。

「援助交際の相手がか？」

小松さんは、おどれおののく顔をした。私には聞こえた。

「なんで、知ってるの？」

「小松さん、君が心配なんだ」

純粹な愛にしか感じない。恋は盲目、なんて感じは全くしない。私は醜いんだ。私は、一瞬、リストカットのことが頭に思い浮かんだ。今、気が付いた。小松さんは何かやつれている。でも、服装だけはいつもよりもどんどん素敵になっていった。

「小松さん、ちょっと来てくれないか？」

小松さんは玲央に付いて行った。私は胸が痛んだ。二人だけの時間って、血のような色の感情が芽生える。

我慢できなくなって二人の後を追った。でも、ナースステーションの中だから、全然聴こえない。許せない気持ちがさっきの気持ちより高まる。隔離病棟の辺りをうろろしていたら、玲央の声がかすかに聴こえる。

「もう、援交なんてやめてくれ！ 君の体なんだよ」

「私のことを可愛いって言ってくれた。汚れていないってほめてくれた。こんな私のことを愛してくれた。私に優しくしてくれた」

言葉が途切れ途切れだが、聴こえる。玲央は、病んだ子皆に優しいそれが、凄く我慢できない。こんな気持ちになるくらいなら、玲央、私をレイプして殺して！

「俺、聞いていて惨めだよ。悔しくないの？ 自分が、不幸なのを認めているようなものなんだよ」

「私、もう汚れているから。どうなってもいいの……あの人が私の最後だよ」

「俺は、君の幸せを何度願ったか。俺の幸福が削れてもいいから、君に幸せになっただけほしいくらいなんだ。もう、体を売るのはやめてくれ！」

「こんな汚れている私なんかをそんな風に思ってくれるの？ 気遣ってくれてありがとね」

可哀想と羨ましいが交差する血のような感情。怖くて、気持ち悪い

異常な感情。そして、リストカットする。もどかしい。

「ちよつと、美麗ちゃん」

看護婦さんの加藤さんだった。リストカットをナースステーションの前で知らぬ間にやっていた。斜めに切って、ざくざくに。加藤さんは、冷静な顔をして、私と一緒に手をつないで私の部屋に行った。「なんで、こんなことしたの!？」

「……」

加藤さんは、涙目になっている。

「なんで、美麗ちゃんは優しい子なのにわざわざ自分で傷つけるよ
うなことをするの……!？」

加藤さんは、段々涙声になっていった。

「カッターを取り上げるよ」

「やだ! これが私の救いなの!」

「これは、決まりなの。早く渡さないと、部屋の中を全部、調べさせてもらうことになるよ」

「わかりました、出します」

また買えばいい。加藤さんにカッターを難なく渡した。でも、また病院の外でカッターを買った。それから、帰って気が付いたら、夕方過ぎて、夜になっていた。

夜、どうしても眠れないから、Dルームに向かった。小松さんの涙声が聴こえる。

「お母さん、ごめんね。私……生きられないんだよ……死んじゃうんだよ……」

電話で母親と泣きながら話している。呼吸が上手くできず、しゃっくりが出ている。どうしたというんだ。なんで、死にたくないんだ。死ぬ。死って何だろう。私にはわからない。いつも死にたいって言うていたけど、死ぬってどういうことかわからない。

「美麗」

玲央がいた。

「お前に話してなかったっけ? あの子、強姦されたときに性病を

うつされたんだ。生きたいのに……生きられないんだ。お前は、相
当に甘えているよ」

玲央に何がわかるっていうの？ 私は涙が出た。走った。女子棟に。
玲央が追いかけてきた。玲央の速い足。すぐに追いつかれた。私の
腕を玲央の強い力で押さえる。私は辛かった。でも、玲央は、小松
さんの方に行くから。

「お前、どうした？　なんで、泣いてる？」

「あんたなんか何がわかるの？」

「いいから、話してごらん」

「やだ！」

あの子の方が可哀想だ。そして、あの子の方が正しいように言う。
それが許せない。玲央も不完全な人間だ。さっきまで完全のように
思っていたけど、信じられない。もう、玲央なんか！

「やめて！　放して！」

私は抵抗する。

「もう、私なんかいない方がいいんだよ。貴方もそう思っているん
でしょ？」

玲央は、優しく言う。

「美麗……死んじや駄目だよ」と、優しく言った。

やめて。優しくしないで。感受性を刺激されて私はもどかしい何か
に当たりたくなる。

気が付いたら手のひらが痛い。私の手のひらに玲央の頬の感触が触
れた。

玲央は頬を手で押さえる。

「玲央は、小松さんのことが好きなんだねっ。なんか可愛がつてい
るよね。お似合いだし」

「別に可愛がつてないよ。お似合いって、そんな面倒な心、俺には
あまりないよ」

そして、私に対してもそういう心がない。私は玲央にとって、妹で
しかない。それ以上の感情はない。私が変なのかもしれない。兄に

恋しているなんて。

「小松さんは、」

「もういい……もういいよ」

私は去った。また夜に切った。どんどん深くなる手首の傷。私のほうが汚れているよ。

次の日、全然眠りにつけなくて、なんとか朝に起きた。一時間しか眠れていないのかもしれない。小松さんは、元氣そうに女子たちと話す。でも、どこかおかしい。やっぱり、もう死んでしまうという予感を感じるのかもしれない。

「小松さん」

「美麗ちゃん」

「きつと、大丈夫だよ。医師に相談すれば病氣も治るよ」
佐々木梨沙が口を開く。

「何、言ってるの？ お姉さんはどこも悪くないよ」

やっぱり、小松さんは玲央にしか話していないのかもしれない。だよね、こういう時は同性より頼れる異性の方が打ち明けられるよね。私もきつとそうしてた。

「美麗ちゃん。何でリストカットしているの？」

小松さんが何かに必死に訴えている。

「何で、私が死ぬの！？ 死ぬなら、私は何の為に産まれて来たの？ 死にたくない……死にたくないよ」

小松さんはうつぶせになって、赤ん坊のように泣き始めた。泣いている時の呼吸の音がきつい。その泣き声がDルームに広がった。玲央は気難しい顔をしている。加藤さんは、泣いている。私は、自分には起こらなかったから安心していい。私、本当は死にたくない。ごめんね、と謝っても都合のいい様に自分をコントロールしたいだけだ。

私は、切りたくなつて、部屋に戻ろうとした。肩をつかまれた。

「美麗、また切るのか？ 小松さんに失礼だと思わないのか？」 玲央は淡々と語る。

私は黙った。違う、自分が嫌いなんだ。小松さんにも何も出来なかった。死の意味が肯定できないから、その自分が許せなくて、切ろうとした。

「私なんか生きているのは、だめ。生きていてごめんなさい。産まれてきてごめんなさい。私なんか産まれてこなきゃ良かったね」本当に生きていて、ごめんなさい。小松さんに代わってあげたい。今すぐ死ぬなら。

少し間が経ってから玲央は口を開いた。

「俺は、お前の母親がお前を堕胎しなかったことを本当に感謝している。だから、そうやって、産まれてこなきゃ良かったなんて言うなよ」

私は気がついたら涙が出てきた。玲央は、私を抱きしめてくれた。

私は更に涙が出た。玲央は、ひと言、

「辛かったんだな」

その言葉だけで他は何も言わなかった。私は呼吸が苦しかった。呼吸をしにくかった。呼吸の音を聞かれるのが恥ずかしかった。生きるってもどかしいね。

それから、何日か経った。小松さんは退院して、遠くに引っ越した。その後、死んだかは謎だ。

私と小松さんとは物凄く仲が良いとは言えない。全然違うタイプだから。リストカットはしていないし、友達は沢山いるし。そんなに羨ましい要素があるのに玲央まで取られるのが怖かったんだ。

病棟の周りの皆が、小松さんと別れの挨拶をしている。中には泣いている子もいる。佐々木梨沙は、小松さんに抱きついていてる。

「お姉さん、元気でね」

こういう交友が羨ましい。私にはない。

小松さんは退院したか、他の病院に移ったか。玲央の話だと、恐らく生きているんじゃないか、って。

「あの子が生きていたら、きっと上手くやっていける。母親がついているしね。友達もいっぱいいる方だし、近くにイトコもいる様だ

し」

「私、玲央が一番大事。私、看護婦になって、玲央と働きたい」

玲央は、笑った。佐々木さんは、小松さんではなく、他に友達をつくっていた。結局はそういう子だ、この子は。龍山はこう言う。

「あの女、やっぱりきちがいだったじゃねえか」

きちがい。そういう表現は汚いからやめた方がいいと思う。玲央は、最近では苦しもうじゃなくなった。私は二つのことの意味で嬉しい。

一つは、玲央に負担がなくなったこと。二つは、小松さんのことで悩まなくなつて、血紅色の想いをせずにすんだこと。あの気持ちは、もどかしかった。

「玲央」

「何？」

「貴方は、私を守るためにこれからも一緒に闘ってくれる？」

「さあ……どうでしょう」

そらした。たぶん、恥ずかしがっているんだ。嬉しくなった。玲央は、余裕が出てきたから。前の玲央に戻るんだ、きつと。加藤さんが寄ってきた。

「玲央くん、美麗ちゃんのこと、すごく心配していたのよ。看護さん、全員にどうしたら美麗が元気になるかな、って凄かったのよ」
私は更に嬉しくなった。こんなに愛されているから、これからも守ってくれる。

玲央は、哲学書をどんどん読み、精神医学の本も読んでいる。こんなに勉強しているんだもの。絶対に精神科医になれるよ。私は信じてるから。

玲央と龍山と私の三人で、今度は散歩に行った。この二人なら、いつか、私のリストカットの心理を消してくれるだろう。もう、独りぼっちは嫌だよ。リス力する、この自尊心の不安定さから解放してくれるのは、玲央だけだよ。

（後書き）

血紅色の想いとは、嫉妬心のことで、
いつもリストカットしている美麗にとっては、血が人生のメジャー
だった。

嫉妬という言葉をきくとどろどろした赤い液体というイメージが彼
女にあったので、血紅色の想いと名づけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6697p/>

血紅色の想い

2010年12月31日03時30分発行